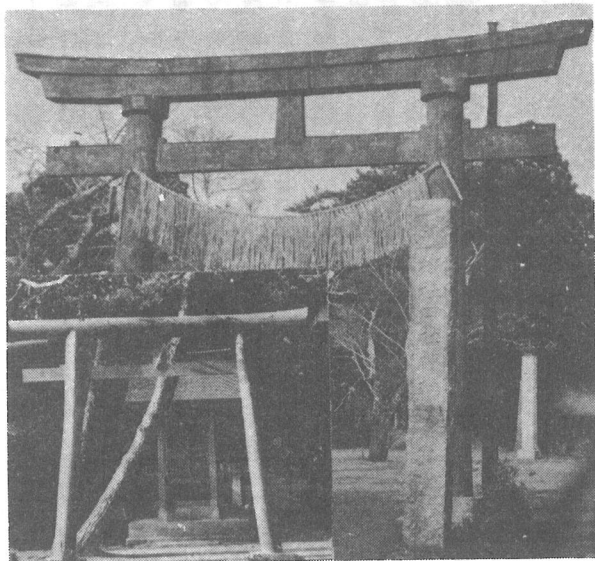


横芝の碑 その十七

四社神社々格の碑と 三峰講の御眷族拝借



「上の二字はおんじやと読むのかい。」ちがうよ、一番上の字は郷弘美の郷の字だよ

「さすが学者だ、そうするとこうじゃと読むのか？」

屋形四社神社の大鳥居と並んで建っている御影石の柱を見上げながら高校生らしい少年達が話し合っていました。

「これはこうじゃと読む、昔は神社に資格があつて、郷社というのはその一つで、この石の柱はそれを表わすいわば碑である。この神社は速須左男尊他三柱の神様を合祀してあるので四社神社と称し、附近でも屈指の名高い神様である」と教えてやると、「神様に資格……よく解らないな、でもおぢさん

ん、何かよく知っているね、神主？」「お前馬鹿だなあ、神主ってのは八幡様でおみ籤をひいて勝負を占っている人だよ、ここは八幡様じゃあないよ」と何処かで聞いた応援歌のような返事が戻ってきました。

少年達と話し合っているうちに何時からであろうか終戦後でも約三十年、この鳥居の傍に立ち、神社詣での善男善女を見守り続けて来たであろう社格の碑に心をひかれて来ました。それに鳥居の奥の方に四社神社とは別の社殿が三棟並んで建っているのに気がつきました。形は小さいのですがそれぞれ鳥居も建っている真新しいものなので、丁度近くで枯枝を拾っていた老母に声をかけて見ました。

「あ、あのお宮かね、金比羅様と三峰様と、えーといま一つは忘れちゃったよ、お宮は新らしいけど神様は随分古いらしいよ、他は知んねえけど三峰様の代参講が出来たのが今年九十になる私のおぶくろが生まれる前だってから」

「代参講、それが今でも有るんですか、教えて下さい」「教えるなんて、私は駄目だよ、すぐ其処の早川隆さんが三峰講の世話人だから行って聞いたらよかつべよ」。早川隆さんは、数回お目にかかり面識もありますので、突然の失礼も顧みずお訪ねして、武州三峰神社と屋形を結ぶ眷族拝借等という

珍らしい話を聞かせていただきました。そして「世話人は自分の他に伊東巖さんと小野一徳さんがいる。又佐瀬嘉夫さんが三峰講の書類を持っているから、それぞれの皆さんにもよく聞いて欲しい」と付加えてくれました。

屋形四社神社の境内に三峰神社の社があります。これは屋形を中心とする三六人の人が集っている三峰講中の建立によるもので、創建は明治の始めらしく、代参講控に、明治十五年六月吉日、発起人伊藤太郎右衛門、海保善右衛門、とあります。毎年正月二十日に抽籤の講を開いて六人づつ交替で代参に出かけるのだそうです。講中には誰か欠員ができないと仲間に入れない厳しい定めがあるので、六年目に一度は必ず代参することになる仕組みということです。抽籤当番の家を今でも座と呼ぶ風習も残っています。珍らしいのは、代参人が受けて来るお札が、御眷族拝借と呼ばれ、今年受けてきたお札は一年限りで三峰山にお返しして、改めて一年間お借りするというのです。これは三峰神社の祭神日本武尊が秩父の三峰をお開きになられた時、一匹の遅まじい山犬が尊の行道の御案内を申し上げました。尊はその勇猛果敢さを愛されて眷族に加えられて護衛を命ぜられたのですが、後の人々はこの山犬を大口真神と称して崇める

ようになり、そのお札を我が家の護守として拝借して来るという習慣となったということです。代参は始まって以来途えたことがなかったらしく、あの烈しかった太平洋戦争の前後にも、昭和十八年に渡辺善一、十九年に津田豊作、二十一年に伊東巖という皆さんが代参しておられることが代参講控に記されています。

社格が廃止され、駐留米軍の取毀指令等の圧迫の中を敢然と立ち続けた社格表示の碑は、四社神社の境内を寄所として、連綿と承継がれて来た三峰講の珍らしい風習を私達に伝えてくれる糸口となったのです。

写真 大鳥居の向って右脚に建っているのが社格標示の碑で、郷社四社神社、と刻まれています。終戦までの神社には国幣社、府県社、郷社、村社等と資格が与えられ、それぞれ国や県、町村等から経費が支出され、村社以上のものには総てこの様な碑が建っていました。が、進駐軍指令で取毀され、残っているのは極めて少ない。左下は三峰山の祠です。(本稿取材に当り、三峰講関係の皆さんに御協力いただきました)

〈給食センター小沢所長寄稿〉

もう山も野も、すっかり春になりました。わが郷の旧跡めぐりなどいかがですか。…係